

平成 2 7 年度

地球環境「自然学」講座

第 2 0 回

テーマ

「森里海連環学」による列島再生への道

講師

舞根森里海研究所長

田中 克

平成 2 8 年 2 月 2 7 日(土)
N P O 法人シニア自然大学校

シニア自然大学校「地球環境自然学講座」

田中克 講師紹介

プロフィール

1943 年滋賀県大津市生まれ。琵琶湖のそばで育ち、子供ころの湖・川・森の中で遊んだ原体験、とりわけ琵琶湖でのホンモロコ釣りの体験から、京都大学農学部水産学科に入学して魚の研究の道に入る。舞鶴 10 年、長崎 8 年（水産庁西海区水産研究所研究員）を経て、1982 年より京都大学農学研究科の助教授・教授を歴任し、魚類の初期生活史（稚魚）研究を進める。日本海におけるヒラメ稚魚の研究や有明海における特産稚魚の生態研究を通じて、海の魚も不可分に陸域（森林域）とつながることに気づく。2003 年に京都大学に森から海までのつながりの教育と研究を進めるフィールド科学教育研究センターが発足するとともにセンター長に就任し、新たな統合学問として「森里海連環学」を提唱した。

2007 年に京都大学を定年退職するとともに、ボルネオ島コタキキナバル市にあるマレーシアサバ大学ボルネオ海洋研究所の客員教授(2010 年まで)として、熱帯域における森里海連環の現実を知る機会を得た。2011 年 3 月に発生した東日本大震災とともに、ボランティア研究チームをつくり、森は海の恋人を復興理念と位置づけ、今日までの 5 年間に 30 回の総合調査を進める。同時に、日本の沿岸漁業と沿岸環境再生の試金石と位置づけられる有明海の再生に関する実験と市民活動を進める。

2014 年に発足した舞根森里海研究所長を務める。京都大学名誉教授、環境省「つなげよう、支えよう森里川海プロジェクト」アドバイザー、文部科学省東北マリンサイエンス拠点形成事業主査、同海洋生物小委員会主査、NPO 法人森は海の恋人理事、同 SPERA 森里海・時代を拓く理事、同海通路理事、同ものづくり生命文明機構理事、同アースウォッチジャパン科学アドバイザー委員ほか。

著書に「魚類学下」（共著、1998 年）、「森里海連環学への道」（2008 年）、「稚魚の生残と変態」（共著、2009 年）、「水産の 21 世紀－海から拓く食料自給」（編著、2010 年）、「増補改定森里海連環学」（共著、2011 年）、「防災と復興の知－3.11 以後を生きる」（共著、2014 年）、「森里海連環による有明海再生への道」（編著、2014 年）、「スピリチュアリティと環境」（共著、2015 年）、「震災と地域の自然文化－大槌発 未来へのグランドデザイン」（共著、2016 年）など。

2016 年 2 月 27 日

2015 年度シニア自然大学校「地球環境自然学」講座第 20 回講義概要

「森里海連環学」による列島再生への道

田中 克（舞根森里海研究所長）

はじめに

日本は、列島の中軸を南北に千五百から 3 千メートル級の脊梁山脈が走り、国土の 67% は森林で被われ、さらに亜寒帯から亜熱帯まで多様性豊かな海が四面を縁取る、森と海の大国である。今では世界の大半が失ってしまった地球の原型が色濃く残っている類稀な国であり、森から海までの自然と自然、自然と人ならびに人と人の多様なつながりを解明し、自然と社会の再生を目指す「森里海連環学」が誕生した所以である。

森里海連環学

生物多様性を調べる一環として、鹿児島から北海道に至る日本海の沿岸を巡り、各地の渚域においてヒラメ稚魚の採集を繰り返し、最終的に「白神山地のブナ林がヒラメ稚魚を育む」との仮説を生み出した。一方、生物生産と生物多様性が限りなく高くかつては“宝の海”と言われた有明海では、命の源筑後川流域において、「阿蘇・九重山系が有明海の特産稚魚を育む」との結論に至った。これらをもとに海域と森林域（陸域）との不可分のつながりに関する統合的な新たな学問として、2003 年に京都大学にフィールド科学教育研究センターが発足するとともに「森里海連環学」を提唱された。

つながりの価値観を再生する

森と海をつなぐを良くも悪くもするのは間に住む“里”の人々の環境に関する価値観による。本来のつながりが里の人間活動の止まるところを知らない拡大によって断絶したり、負のつながりに転化した現実を変え、崩してしまった自然を再生して続く世代に送り届けることを最終ゴールにした学問、そのためには個別専門分化した分野の統合化を図り、つながりの価値観を創生する学問として、森里海連環学が誕生した。それは、自然科学と文系学問の融合、科学と社会のつながりを再構築する学問といえる。

復興理念としての森は海の恋人

2011 年 3 月 11 日に発生した巨大な地震と津波は、東北太平洋沿岸域に甚大な被害を及ぼした。1989 年に宮城県気仙沼市の畠山重篤氏を中心とする牡蠣養殖漁師は“森は海の恋人”の旗のもとに、豊かな海を取り戻す植林活動や子供

達の環境教育活動を始めた。森は海の恋人やそれを支える森里海連環学を復興理念と直感した研究者らは、千年に一度と言われる大震災が沿岸生態系に及ぼした影響と回復の過程を調べ、歴史の証言を世界に発信して続く世代に伝承する「気仙沼舞根湾調査」を2011年5月に開始し、海の生き物たちの逞しい生命力が地域社会の再生に貢献するなどの成果を生み出した。

先人の知恵に学ぶ

三陸沿岸域をシーカヤックで巡り、海から陸域の自然や人の暮らしを見つめ直し、辿り着いた漁村で海とともに生きる漁師から本音を聞き、自然とともに生きる意味や幸せの原点を問い直す「海遍路」（NPO 法人海遍路主催）を通じて、各地に先人の知恵を生かし、自然の脅威を受け入れ、「太平洋銀行」などと呼ばれる自然資本の利子という恵みをつつましくいただく暮らしの原点が存在した。そこには、自然大国ニュージーランドの先住民マオリの自然観や文化と多くの共通点を見ることができる。

終わりに

社会運動「森は海の恋人」と「森里海連環学」の協同は、時代が求める新たな統合的な学問を生み出すモデル的試行と位置づけられる。おりしも環境省は総力を挙げて「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトを立ち上げ、国民運動的に多様なつながりの再生をもとに地方創生に踏み出した。「時」をつなぎ、「場」を紡ぎ直し、「間」を大切にする“いのちのふるさと海と生きる”社会の創生が求められる。

「今日の日はさようなら」

金子詔一作詞・作曲

(1)

いつまでも絶えることなく
友だちでいよう
明日の日を夢見て
希望の道を

(2)

空を飛ぶ鳥のように
自由に生きる
今日の日はさようなら
またあう日まで

(3)

信じあうよろこびを
大切にしよう
今日の日はさようなら
またあう日まで
またあう日まで